2020年04月01日 新潟日報 朝刊 広告２面 019頁　　(C)新潟日報社　無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

未来のチカラ in 上越　つたえる　つながる　つかえる　新潟日報

挑め、上越。

Joetsu Challenger's INTERVIEW
上越チャレンジャーズインタビュー

#010 高田の文化を守り、発信する。

高田文化協会 副会長（事務局長兼任） 河村(かわむら) 一美(かずみ)

(75)

河村一美さん(75歳)は、高田文化協会の事務局長と副会長を兼任し、隔月で「文芸たかだ」を発行している。作家としても活動していて、BSNドキュメント賞、文芸たかだ・井東汎賞、小川未明文学賞を受賞。著書の「昔、瞽女さんが雁木の町を歩いていたんだよ」は好評発売中。笑顔がステキで一緒にいる人みんなを笑顔にしてしまうパワフルな女性。河村さんのような方がたくさんいたら、元気なまちになりそう。

このお話が来たとき、若い方々の中に並ぶのが恥ずかしいって思ったけれど「挑め上越」ですからね(笑)。お受けしました。昨年、受賞(小川未明文学賞優秀賞)した「昔、瞽女さんが雁木の町を歩いていたんだよ」が発刊になり、今は読者の方々にお届けする郵送作業に追われています。

この物語は、東本町にある「瞽女ミュージアム高田」の柱時計と高田のまちの雁木がヒントになっています。家のどこにいても聞こえる柱時計の音は、目の不自由な瞽女さんに時間を教え、家族を見守ってきました。昔は目の不自由な方は、瞽女さんになるか、あん摩さんになるかでした。瞽女さんは芸事を一生懸命して、人さまの前で三味線を弾いたり、唄をうたったりしてみなさんを喜ばせるんです。とても厳しい修業が必要だったそうです。

2年前の10月にこの物語を書きましたが、その直前に私はがんの治療で入院していました。病院で物語の構想ができて、退院してから2週間で書いた作品が受賞して、まさか本になるなんて。ステージ4で、半年後に死ぬって言われたけれど、今、元気に生きています。入院していたからこその構想が生まれたことを考えると、人生に無駄なことなんてなくて、病気も無駄じゃなかったって思います。

私には5人の息子がいます。3人は普通の人間の息子なんですが、4番目は「がんのすけ」と言って自分のがんに名前をつけました。5番目は、この本の主人公「俊太郎」が稼ぎ頭です(笑)。「5人ともいい子に育ってくれた」って思います。人前でこんなに話せるようになったのは、58歳のときにエフエム上越のアナウンサーのアシスタントになってからかしらね。面接の方が「顔にハリはないけど、経歴にハリがある」って。失礼よね(笑)。採用後、最初にマイクに向かって読んだのは、偶然にも私の祖父、横尾義智の話でした。緊張していた私を、祖父が助けてくれたと思ってます。祖父は、ろうあ者でありながら村長を務めました。障がいがあっても、祖父のような生き方ができると、周りでは今も語りつがれています。安塚では、ろうあ者との交流があり、毎年、私も招かれ、そのご縁で今年は富山で講演をすることになっています。

私は今のところ障がいを持っていないので偉そうなことは言えませんが、祖父のことや祖父との暮らしについて率直にお話しするつもりです。いつも頼まれたことはお受けして、何でもやってみるの。15年くらい前には映画「ふみ子の海」で仲居さんとして出演しました。本当は芸者の役が良かったのに頭が大きくて、かつらが入らなかった(笑)。ファッションショーのモデルもやったことがあります。オードリー・ヘップバーンみたいな格好をして、みんなに笑われたけれど楽しかったです。

こんなふうに話すと私が自由に生きてきたようにみえるかもしれないけど、それは主人が死んでから。私が65歳のときに亡くなりましたが、それまでは「妻は自分のもの」という感じで、とても亭主関白でした。でも彼は認知症になって、うそのように良い人になりました。デイサービスとショートステイを活用して、家で5年間、介護をしました。

ちょうど介護を始めたころに、当時、高田文化協会の副会長で陶芸家の高井進さんから事務局長になってほしいと言われました。事務局長の仕事と介護の両立が良かったのでしょうね。協会の仕事をしていると彼が恋しくなったりして。彼は5分経つと、その前のことは忘れてしまうけれど、言葉は意外に残っていました。あるとき、あんまりチョコレートを食べるものだから「チョコレートと私、どっちが好きなの?」と聞いたら「チョコレートは甘くておいしいから好き。君は心が好き」って言うのです。名言でしょう。キスもね、「愛している」ってことが伝わるでしょう。だから、介護のときも、よくキスをしましたね。気持ちが伝わると落ち着くのです。

最後の夜は本当ににおもしろかった。おトイレの失敗の連続。間に合わないの。「それまでは、きちんとできていたのに、どうしたんだろう」って思ったら、次の日に亡くなりました。人の最期ってこうなのかなって。私は5年だったから、楽な介護だったと思います。それでも感情が高ぶり、ワーッとなったときは「一人百首」と名づけて介護の短歌をつくりました。これを書かなきゃ」と思うと、冷静になれました。書くことに助けられたのね。

小さいころから書くことが大好きで、紙がない時代だったので母が使っていた便箋の裏などにいつも文章を書いていました。だから、3番目の子どもが幼稚園に入ったのを機に、児童文学者の杉みき子先生の教室に通い始めたときはうれしかったですね。文章を書く基礎から教えていただき、今も尊敬しています。

40歳で高田文化協会の会員になり、52歳で「文芸たかだ・井東汎賞」をいただきました。「半玉・桃子」というタイトルで、実在のモデルもいます。上越で現役の芸者さんなの。ストーリーの中には、私がそれまでの人生で見聞きしてきたことや妄想が入っています。人間一人が経験できることは、そんなに多くないですから。

私のことをお話しましょうね。私は、1945(昭和20)年1月に満州で生まれました。父は軍人で諜報機関にいたので、敗戦の情報も早く知っていたのでしょう。同年の10月に、私は母に背負われて日本に帰ることができましたが、父は5年間シベリアで抑留されました。

5年後に父が帰ったとき、母は、別な男性と恋愛をしていました。私の父は、母のことをあきらめて東京に行き、別な女性と結婚しました。戦争中は珍しい話ではなかったのですよ。だから、私には異父兄弟と異母姉妹がいて、今ではみんなと仲良くしています。

当時、私の家は高田の西城町にありました。高校を卒業して浪人しているときに突然、母が料亭「宇喜世」の斜め向かいに「都寿し」という店を開いたのです。2番目の父は高校の先生でしたが、亡くなった後に、日本舞踊の先生をしてくれた母がなぜかお寿司屋さんを始めたんです。数カ月で閉めるんですけど(笑)。私も大学どころではなくて、お店の手伝いをしていると、芸者さんやその卵の半玉さんが出入りしましてね。きれいで、かわいくて、華やかで。そのときの桃子さんの印象が強かったのでしょう。30年後くらいに「半玉・桃子」の物語ができたのです。

お寿司屋さんで夫と出会い、かけおち同然でアパート暮らしを始めてね。私が19歳で彼も大学を出たばかりでしたから両家とも大反対。子どもができて、やっとお許しが出て、夫の家に入りました。大変だったことですか?税理士だったおしゅうとさんが、事務員さんと怪しい仲になって、昔は事務所も家も一緒でしたから、お姑さんが焼きもちをやいてイライラ

年齢なんて関係ない。やってみたいことには、どんどん挑戦する。

して。男は本当にダメね。そんなことが、少しずつ私の小説には出てきます。高田文化協会の会員として小説を書き続けて、事務局長になったのが60歳のときでした。

事務局の仕事は「文芸たかだ」を2カ月に1回発行すること。原稿依頼から始まり、表紙を決めて、校正がすべて戻ってきたときは「やったー」という感じ。できあがるとうれしいけれど、すぐに次の号が始まります。編集の仕事を始めて15年間ですが、「文芸たかだ」の歴史はとても長い。1959年から61年も続いて、今年の3月で366号です。第1回の発刊の辞は、雅子皇后のおじいさまの小和田毅夫氏(当時、高田高校校長)が書かれています。内容は小説、詩、短歌、俳句、川柳、エッセイなどで、投稿もあり、会員以外の方にも執筆依頼をしています。現在、会員は298人。読むだけの会員さんも多く、上越を中心に新潟、東京などにも会員さんがいらっしゃいます。

これまで続いたのは、「頼まれたらイヤと言えない」「参加して喜ぶ」という高田人の気質でしょうか。みなさんから支えていただき、ありがたいことです。城下町で、みなさんが文化を大切にしています。でも、何が文化か、と問われるとわかりませんけれど、こうして続いていくことが文化なのかもしれません。

歴史をさかのぼると「文芸たかだ」の前身があります。疎開文化と呼ばれ、1944年から49年ごろまで、詩人の堀口大學さん、写真家の濱谷浩さん、芥川賞作家の小田嶽夫さんたちが、東京から疎開して高田に住んでいました。戦時中の暗い時代に、歴史や文学について学ぶ講演会を開催しています。また、年に5回、歴史をめぐるツアーを市民向けに企画しています。また、障がいのある方の作品に絵や文字を添える「ぬくもり展」も年に1回開催して、今年は10回目になります。

みんながよく知っているようで、知らないことがたくさんあるから、高田の文化について一冊の本にまとめたいですね。

高田には、「あわゆき組」「雁木のまち再生」「街なか映画館再生委員会」「高田瞽女の文化を保存・発信する会」など、まちを盛り上げていこうとするグループがたくさんあります。私たちの高田文化協会もそのひとつです。歴史を勉強する会もたくさんあって、もし、それぞれのグループが連携したら、とても大きな力になると思います。でもこれが難しい。考え方がちょっとずつ違って、時差の問題もあるし、高田の人は人と交わるのが苦手でね。でも、ここ10年くらいで、いろんなグループが立ち上がり、今は若い人も活動しておもしろくなってきました。これから、もっとおもしろくなるって思っています。新しいことを取り入れながら、古いものも大事にして、高田文化協会にもちょっと目を向けていただいて。年間12,000円の会費で、どなたでも入会できます。ぜひ、ご入会くださいね[tel.025-525-2205](笑)。

今後の個人的な夢ですか。昨年は優秀賞だったから、やっぱり小川未明文学賞の最優秀賞をとりたい!それから今回、発刊した物語がお芝居になったら、役者をやってみたいですね。

田中産業株式会社は、上越のさまざまな挑戦を応援します。